

闘病記の社会学的研究 Sociological Study on *Tohbyoki*

門林 道子

1990年代後半から、患者・家族と医療者の相互理解を深める際に重要な役割を果たすという視点から闘病記に注目し、闘病記を社会学的視座で研究することを始めた。きっかけは夫のがん死であった。出版された中でも約半数を占める1960年代からのがん闘病記約550冊の文献調査と、著者へのインタビューなどの質的調査を行った。そして、告知をめぐる変容といった社会的要因に起因するがん闘病記の変遷を明らかにし、マスターナラティブを提示した他、「闘病」の語源をも追究した。そのがん闘病記についての総合的な研究は、2010年学位論文となり、2011年10月、青海社から『生きる力の源に—がん闘病記の社会学』の書名で出版され、「新しい分野を切り開く」（2011年11月21日朝日新聞）と取り上げられた。研究で最後まで追いつけたのは「闘病記を書くことの意味」であった。調査の結果、「書く」という行為は不条理な病いを否定的にのみとらえるのではなく、病気と共存していくための意味づけを可能にし、自己の再構築をもたらすことを明らかにした。現代の闘病記は、病む人を病気の犠牲者やケアの受け手とする見方から能動的な行為者へと転換する移行を可能にしている。患者はケアされると同時にケアする立場にもなっていて、そこに現代社会における闘病記の大きな意義があると結論づけた。

その後10余年、現在までの私の研究はいずれも科研（基盤C）に採択された4つのテーマと共に進展している。まずは、①「乳がん・子宮がん患者を対象にした『書く』ことでのケア—臨床応用をめぐる縦断的研究」であった。医学・看護学の臨床経験者を研究分担者とし、「書く」ことのケアとしての有効性の検証を倫理審査や協力者への説明会を経た上で、乳がん・婦人科がん体験者に行った。「書く」ことは自己洞察を促し自己再構築の機会となり、またグループでの話し合いが体験の共有や共感、親密性の構築に繋がることがわかった。続けて、がん闘病記の内容変化を経時的に捉えた②「がん闘病記の比較社会学的研究—語られる病いがもたらす個人と社会の相互作用」では、2006年以降に出版されたがん闘病記100冊の文献調査を行い、以前の内容と比較検討し考察を重ねた。2人に1人ががんに罹患する現代のがん闘病記は死にゆく過程、死をも自ら創出する時代の闘病記といえることを明らかにした。次の③「闘病記の比較社会学的研究—日英がん体験記にみる相似と相違」では、感情を押しとどめるのが美德とされた文化に踏み込み、がんと向き合う人々に自らの思いを表出することを促し、迷う患者に多面的な示唆や実践的なサポートを提供したイギリスのがん体験記に言及した。それらの研究の成果は、(2025)年内に出版が決定している著書に詳述している。現在、今年度採択された④「闘病記からライフストーリーへ—『乳がん』は個々の人生にどう意味づけられたか」に取り組み始めたばかりである。出版数がもっとも多い「乳がん」を対象に、「がん」という病いへの罹患を著者はどう捉えたのか、闘病記執筆と後の人生に於て、病いが個々の人生にどう意味づけられたかを、ライフストーリー・インタビューを実施し明らかにすることを目的にしている。

(かどばやし みちこ 日本女子大学学術研究員)